ジョン・レニー・ショート著
小野寺　淳・大島規江　監訳
『ビジュアル版 世界の地図の歴史図鑑―岩に刻まれた地図からデジタルマップまで』
柊風舎　2010年１月　224頁　13,000円＋税

本書は，John Rennie Short：The world through maps - a history of cartography［地図をとおして見た世界―地図学の歴史］（224p.）の邦訳書で，原著はFirefly books社から2003年に刊行された。原著のタイトルと邦訳書のタイトルは異なる雰囲気を与えるが，内容は巻末の「監訳者あとがき」を除いて全く同じである。

全体は，１から20の単元（以下，便宜的に第～章というように表記する）で構成されており，それらは大きく第１部～第６部にまとめられている。また，各章は３～６のテーマに分かれ，それらのテーマには見開き２頁ないし４頁が割当てられている。そして，A４判という判型を生かして，百数十の地図類が鮮明なオールカラーで収録されている。本書の最大の特徴は，これら極めて多様な地図類でもって文章の理解が格段に深まるよう工夫されていることにあり，邦訳書のタイトルたる「ビジュアル版」と銘打っているのも頷ける。この紹介文でかかる特徴が読者にお見せできないのははなはだ残念である。

さて，地図に対する原著者の基本的な考えは第１章の巻頭（８頁）に次のように記されている。

「地図は人間の経験にとっての中心をなすものであり，地図製作は主要な社会的偉業である。様々な意味において，地図および地図製作の歴史は，人間社会の歴史である。本書は，地図の歴史的発展と地図製作上の主要な進歩を見ることによって，人間のかかる最大の活動を研究する。」

原著者のこのような考え方のもとに，本書は以下のような部・章・テーマ（「　」で記す）で構成されている。いささか長くなるが，端的に内容をご理解いただくために，煩を厭わずに記すことにする。

第１部　序

第１章　地図の紹介：「地図の言語」「縮尺と投影図法」「方位」「記号，絵図，平面図」「グリッド」「沈黙と偽り」…８～25頁

第２章　最古の地図：「岩に刻まれた地図」「アフリカにおける初期の岩絵図」「世界中の岩絵図の解釈」「狩猟採集民の地図」「先住民族の地図製作」…26～35頁

第２部　古代

第３章　古代世界の地図：「地図と農業の発達」「地図と都市文明の発達」「南アジアの地図」…38～45頁

第４章　古典世界の地図：「古代ギリシアの地図学」「古代ローマの地図」「クラウディオス＝プトレマイオス」「ビザンツ帝国の地図」…46～55頁

第３部　中世

第５章　中世ヨーロッパの地図：「マッパ=ムンディ」「ポルトラーノ海図と地図帳」「国土図と地域図」…58～67頁

第６章　イスラーム世界地図：「イスラームの地図学」「イスラームの世界図」「イスラーム地域図の製作」「イスラームの天文学」…68～75頁

第７章　中国と極東：「中国の地図」「極東の地図」…76～81頁

第４部　探検時代のはじまり

第８章　新世界における地図製作の伝統：「中米の地図」「南米の地図」「北米の地図」…84～91頁

第９章　新世界の地図化：「南米の地図化」「北米の地図化」「太平洋の地図化」「海図帳の発展」…92～101頁

第10章　ヨーロッパのルネサンス時代の地図：「プトレマイオスとルネサンス」「宇宙誌」「挿絵になった地図」「地図学と測量術」…102～111頁

第11章　国土の地図：「国家領域の地図化」「イングランドにおける地域図の作成」「ルネサンス期の都市の地図化」…112～121頁

第12章　地図帳の作製者たち：「名著『世界の舞台』」「メルカトルの『アトラス』」「大地図帳，天体地図帳，都市地図帳」…122～133頁

第５部　植民地時代の地図製作

第13章　大英帝国の地図製作：「大英帝国の領有権主張のためのものとしての地図―フランスとの角逐」「争われた領有権」「オーストラリアの地図化」「インドの地図化」「アフリカの地図化」…136～147頁

第14章　地図製作を鼓舞する啓蒙運動：「地図学と啓蒙運動」「啓蒙都市の地図化」…148～151頁

第15章　新国家の地図化：「初期アメリカ共和国の国家アイデンティティの創出」「新国家のための新しい地誌」「国土の調査・測量」「大規模な調査」「地方自治体の地図化」「フランシス＝ウォーカーの統計地図帳」…152～165頁

第16章　地図学との出会い：「東南アジアの地図」「中央アジアの地図」「アフリカのサハラ以南の先住民の地図」「オスマン帝国の地図学」…166～175頁

第17章　万国共通の地図化：「海を支配する」「南極の地図化」「19世紀の都市図」…176～183頁

第６部　現代世界の地図化

第18章　主題図：「道筋と流れ」「階層と平面」「社会的差異の地図化」「疾病と犯罪の地図化」「地質・気候・天気の地図化」…186～201頁

第19章　地図と権力：「監視の手段としての地図」「境界線を引く」「プロパガンダとしての地図」「地図と軍事」…202～209頁

第20章　現代社会の地図学：「模造品と偽造品」「図法をめぐる論争」「地図学の現在」…210～217頁

以上のような構成をなす本書が，従来の地図学史の書物と比較して指摘されるべき大きな特徴，特に日本で刊行された類書と比べて特筆すべき意義としては，以下のようなことが挙げられる。

第一には，従来はあまり紹介されてこなかった地図製作の成果にも，多様な図版を含む多くのページが割かれていることで，アメリカ合衆国における地図作製史や大英帝国の領土拡張に伴う地図作製，あるいは征服以前の中南米の地図などに関する部分がそれにあたる（８章・13章・15章）。

第二に，地図の作製目的として見逃せない側面，すなわち政治的・軍事的な目的のもとで地図が作製されてきた点を，具体例を挙げつつ明確に指摘していることである（13章・19章）。

本書のもつこれらの優れた特徴は，原著者が，イギリス出身でアメリカ合衆国東部の大学で教授をしており，政治地理学や都市地理学の学術書を著していることと深く関連しているのであろう。

一方，評者としては不満な点もある。例えば，第7章のはじめで，「中国には豊かで長い地図製作の伝統がある」（76頁）と記してあるにもかかわらず，他の地域に関する記述に比較すると，わずかに３つの図を含む４頁が割かれているに過ぎない。しかもそのうちの「平江図」（78頁）は左右が逆で，邦訳書でも改められていないのは，残念である。（17世紀の道路地図（187頁）も同様に左右が逆のままになっている。）

また，翻訳についていえば，日本の近世絵図に関する権威である小野寺淳氏とその教え子の大島規江氏が監訳されたとのことで，全体として原著の英語の趣旨がわかりやすい日本語に置き換えられており，お二人のご苦心に敬意を表したい。とはいえ，本書の核となる地図関係の用語について，その日本語訳が一定していないのは気になった―例えば，mappingには「地図化」・「地図製作」・「地図」・「地図作り」，cartographyには「地図製作」「地図化」，atlasには「アトラス」「地図帳」など―。特に，同じ章や同じテーマのなかで，格別の使い分けがなされるべき理由が見当たらない場面でも異なるのは，翻訳書としていかがなものであろうか。そこで，評者としての役割を超えているかとも考えたが，この紹介文中の章・テーマや引用箇所については，評者が邦訳書と異なる日本語訳に変えた部分もあることをお断りしておく。

最近評者は，大きな判型を生かして鮮明で多様な地図類がオールカラーで収録されていること，しかも比較的に入手しやすい価格であることの2点を，外国書の購入の目安にしている。本書は，この紹介文のはじめの部分で記したように，まさしくその第一の点にぴったりで，大学の教養教育での地図学史ないし地理思想史の参考図書として，教員の側にとっても鮮明な図を授業で紹介できるという利点があり，学生の側でも見て楽しく，読んで理解が深まること請け合いで，心から推薦したい。ただ，第二の点に関しては，原書が出版当時40米ドル・50カナダドルだったことも考慮すると，邦訳書の価格が現在の換算レートの倍程度―海外古書店での現在における本書の新本の価格―であれば，出版社が予想する以上に多くの購買者に迎えられ，原著者や邦訳者の労苦も大いに報われるのではなかろうかと，残念な気がする。

（戸祭由美夫）